狂詩曲（ラプソディー）

涙（ほろ）び

上竹瑞夫

涙(ほろ)びの狂詩曲(ラプソディー)

上竹瑞夫

涙(なみだ)びの狂詩曲(ラプソディー)

1985年3月15日　第1刷発行

定　価　1300円
著　者　上竹瑞夫
装幀者　ナンバーワン・デザイン・オフィス
編　集　株式会社ペック
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社講談社
〒112　東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03）945-1111（大代表）振替　東京 8-3930
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
© Mizuo Uetake 1985. Printed in Japan

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-06-201908-6(0)　　（ペク）

目次

第一章　再会　5
第二章　残り火　33
第三章　群棲　59
第四章　残酷な夜　96
第五章　襲来　127
第六章　大干ばつ　174
第七章　空白の三十分　204
第八章　壊滅　240
終章　旅立ち　269

装幀　ナンバーワン・デザイン・オフィス
カバー写真　広川泰士

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

泯(ほろ)びの狂詩曲(ラプソディー)

第一章――再会

1

路上には熱風が舞っていた。

木田五郎は、大手町にある東日新報を早目に退社した。外には、梅雨の季節だというのに、真夏のような残光が、ビルの谷間に影を落としていた。

（――今夜もまた、熱帯夜になりそうだ）

思わず空を見上げてつぶやいた。例年、関東甲信越地方に、梅雨入り宣言が出されるのは、六月十日頃である。それが、今年は、はしり梅雨の前兆現象すら現われていなかった。日本上空には、強い太平洋高気圧が、どっかりと居座っていた。

木田は、ぎらつく夏の陽光が、ポプラ並木に反射し、キラキラと輝くのに見とれていた。木田は時計を見た。七時十分程前だった。タクシーを探した。だが、あいにく空車が見つからなかった。

（今年はどうなっているのだろう！）

木田はポケットからハンカチを取り出し、流れ落ちる汗をふいた。熱風のためか、メガネのレ

ンズが、見るまに曇っていった。躰がだるく、気分が悪かった。
「――急がなければ。遅れそうだ」
木田はひとりごち、ちょうど走ってきたタクシーを止めた。
「――高田馬場」
ぶっきらぼうに、運転手に行先を告げた。クーラーのきいた車の座席に身を沈めると、嘘のように汗が消えていった。木田は背広のポケットから、一通の手紙を取り出し、読み始めた。それは、学生時代に所属していた、劇団「新星座」の集いの案内状であった。
学窓を離れて幾年月。諸先輩、諸兄におかれましては、益々ご健勝のことと推察申し上げます。新星座も創設以来、十年の輝かしい歴史を刻みつづけております。
この度、十周年を記念し、同好の志が集まり、旧交を温めることになりました。つきましては、お忙しいことと存じますが、万障お繰り合わせの上、ご出席下さいますようお願い申し上げます。
……
案内状の最後に、発起人たちの名前が連らねてあった。懐かしい人たちばかりだった。関東電力に入社した瀬古純、通産省の役人になった中島登、農水省に入った佐木高夫たちの顔が通り過ぎていった。
発起人の最後に記された、千野理沙という名前に、甘い青春の感傷の渦が押し寄せた。

（あいつ、昔の名前のままだ。まだ結婚していないのだな）

発起人名の下に書かれた、それぞれの勤務先名は、演劇同好会という華やかな会に所属していた割には、ひどく地味な職業が多かった。それぞれに、社会人として、堅実な道を選んでいた。

木田自身、新聞記者という、演劇とはおよそ関係のない職業についた。木田は地方記者生活をへて、今年の四月に、本社に戻って来たばかりだった。

早稲田通りから、明治通りに向う交差点で、木田はタクシーを降りた。案内状に記された蕎麦屋は、学生時代に、よくコンパを行った店であった。彼は久し振りに、学生に戻ったような気分を味わっていた。入口の扉を開けた。ちょうど、一番仲のよかった、瀬古純が、階段を降りてくるところだった。

「オー、来てくれたか。久し振りだな。皆んな集っているよ。まあ、上った。五郎、加代が来てるぜ」

「ええ、笹本加代が……」

「あれ以来、会っていないんだろう。別れてからさ。あいつ、随分変ったぜ。びっくりする位きれいになった」

「……」

「さあ、上がれよ。卒業以来、皆んなに会うのは初めてだろう」

木田は、瀬古の後に従い、階段を上って行った。つきあたりの部屋で、華やいだ談笑の声がし

ていた。部屋の襖を開け、中に入って行った。およそ二〇人ほどいた人たちの視線が、一斉に木田に注がれた。

「やあ、五郎じゃないか――」

中島が大きな声をあげた。

「いつ東京に戻ってきた。それにしても、連絡位……」

「すまん、すまん。久し振りの東京で、いろいろと――」

七年の歳月の流れが、一瞬の内に流れ去っていた。

(昔の仲間というのは、いいものだな!)

「……五郎、ここにおいでよ」

千野理沙が木田を呼んだ。理沙と加代の隣に席があけられた。木田と笹本加代の視線が交わった。

「――お久し振りね」

加代が笑顔で木田を迎えた。懐かしさが込み上げてきた。七年ぶりの再会であった。

(それにしてもきれいになったな!)

木田は眩しいものを見るように、加代を見つめていた。かつてのぎすぎすした躾付きが消え、ふくよかな女の匂いに満ちていた。

「あら……。そうだったわね。加代の隣に座りなさいよ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

理沙が二人の感情の流れをくみとったのか、そう言った。理沙の表情に、微妙な女心の綾が浮んでいた。木田はあえて理沙の隣に座ることにした。すぐに、同期生たちが、彼のもとに駆けつけて来た。

幹事役の一人である、後輩の篠原清が突然立ち上がった。

「お静かに願います。今日は珍しい先輩が来て下さいましたので、紹介します。東日新報の木田先輩です」

拍手が起った。

(篠原は三年ほど下だったはずだ。それにしても変ったな。入会した頃は坊主頭だったのに……)

篠原は紺のスーツに身をつつみ、どこから見ても、サラリーマンといったスタイルをしていた。

「ご紹介にあずかりました、木田五郎です。『新星座』も、創設以来十年とか。誠に喜ばしい限りです。これから、ますます隆盛を迎えられますように——。

私事にわたり恐縮ですが、学窓を離れてから、パリに一年、政府の交換留学生として行っておりました。その後、東日新報の記者として、福岡支局に居りました。瀬古君から、手紙で、このような集いが何度か開かれていたことは存じていたのですが……。

今年の四月、本社勤務を命じられ、東京に戻って来ました。これからは、どしどし出席させていただきます。よろしく!」

「先輩、頼りにしてますよ」

後輩たちの声が飛んだ。木田は挨拶をしながら、一座を見渡した。三分の一ほどの顔は、見知らぬ顔であった。中には数人女性の顔もあったが、記憶の底に、名前が浮んでこなかった。
再び、それぞれの年代別に、人の輪ができた。木田の周囲に、同期の連中が集まって来た。先程木田を紹介した篠原が、ビール瓶を片手に木田のところに来た。
「いやあ、嬉しいな。木田先輩に会えるなんて——。少し太りましたね」
人懐こい童顔の篠原は、本当に嬉しそうな表情を見せた。
「篠原。すっかり貫禄がついたじゃないか。今は何をしているの」
「三洋銀行ですよ。銀行マン。電算室で、毎日、コンピューターとにらめっこしています」
「それじゃ、高度情報社会の担い手という訳だね」
「とんでもない。毎日、コンピューターに振り回されているだけですよ。今や、コンピューターがなくては、銀行の業務は遂行できませんからね」
篠原は懐かしそうに、木田にビールをついだ。
「木田先輩、僕のことは覚えていますか」
「待てよ。君は……」
「やだな。中西ですよ。忘れてもらっては困りますよ。二年後輩の——」
「ごめん、ごめん。チョンボの中西か。それにしても立派になったな。見違えたよ」
「もう、チョンボの中西はやめて下さいよ。これでも、社会人なのですから——」

「どこにいるの」
「東都コンビニエンス・ストアーですよ」
「君がね」
(学生気質丸出しの、おとなしい男だったが――)
「これでも、妻子のある身ですよ。先輩は……」
「いや、まだ独身だよ」
木田は加代に目をやった。彼女は困ったような表情を見せた。
「あら、五郎、あなたまだ一人なの――」
理沙が会話に割って入った。
「そういう君は――」
「五郎に振られてから、清い身を守っているわ」
「あら、そうかしら」
加代が皮肉っぽくつぶやいた。二人の女の間に、微妙な女心の火花が散った。
「五郎、お前、あいかわらずもてるね」
いつの間にか、木田の傍に座っていた佐木が、羨ましそうに言った。
「しかしな、五郎よ。不思議なものだな。演劇に血道をあげていたのに、演劇の道に進んだのは、加代だけだものな」

通産省の役人になった中島が、感慨深そうに言った。
（瀬古が言っていたが、中島は中小企業の社長の娘と結婚したとか。いずれ義父の跡を継ぐのだろう）
「役人になったり、銀行マンになったり。皆んな変った。華々しくやっているのは、加代一人ということになるか」
瀬古がことばを継いだ。
「あら、失礼ね。私だって、東洋テレビのディレクターよ」
理沙がすねたように、瀬古をにらんだ。
（華やかか――。そういえば、加代のゴシップにさんざん悩んだが……）
木田は加代を見た。加代は笑っていた。彼は加代のあまりの変りように驚いていた。自分の青春の全てを燃焼させた女とは思えなかった。
久し振りに、木田が顔を見せたので、彼を中心に話題が移っていった。
木田は加代に話しかけようとしたが、その場の雰囲気がそれを赦さなかった。突然、誰れかが立ち上がり、校歌を歌い出した。皆んなが、後に続いた。久し振りに、校歌を聞いたように、木田には思えた。
「どうだ、皆んな、新宿あたりに繰り出さないか。五郎が東京に戻ったお祝いをやろう」
瀬古が皆んなを促した。

「賛成。こうなったら、徹底的にやりましょう」
理沙が大声で叫んだ。
「よし、それでは諸君、僕の後に続きたまえ……。夢の桃源郷に案内してしんぜよう！」
瀬古が芝居がかった口調で言った。瀬古のことばに促され、皆んなが立ち上った。篠原が駆け寄って来た。
「先輩たち、どこへ。我々を置いて行くんですか——」
「おお、篠原。後は頼むぞ。新宿の『かもめ』にいる」
「『かもめ』ですね。後から、僕たちも行きますよ」
「ああ、よかったら来いよ」
瀬古は出口で立ち止まり、集った人たちに、
「後輩諸君！　今夜はこれで失礼する。後はよしなに……」
と、きどって言った。木田たち同期生は、集いの会費を払い、蕎麦屋を出た。外は、むっとするような熱気につつまれていた。
「暑いな。いつになったら梅雨になるのかしら——。こう暑くては、かなわないわ」
理沙が星空を見上げて、嘆息した。
「そういえば、今年は雨が降らないわね。昨年の秋から雨が少なかったわ。ことしは暖冬で雪も少なかったし」

加代が理沙に同調するかのように言った。佐木が二人の傍で、
「何んでもね。記録によると、雨量が、例年の二〇パーセントしかないそうだよ。作物に被害がでないといいのだけれど……」
と、心配そうにつぶやいた。
「今に雨が降るさ。そう心配するほどのこともないよ」
木田が佐木に言った。
「オーイ、タクシーがつかまったぞ。急いだ、急いだ」
車を探していた瀬古が呼んだ。皆んなは、小走りに、瀬古のところに走って行った。

2

「かもめ」は、昔と少しも変わっていなかった。壁の赤レンガの色が、幾分煤けて黒ずんだものの、昔日の面影をそのまま残していた。
「かもめ」は青春の時代に、演劇論や人生論を語り合った場所だった。
瀬古が予約したのだろう、店の奥に予約席がもうけられていた。マスターが柔和な笑みを浮かべ皆んなを迎えた。
「やあ、お揃いで——。あれ、木田さん。いつ東京に……」
「ご無沙汰。四月にね。懐しいな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com